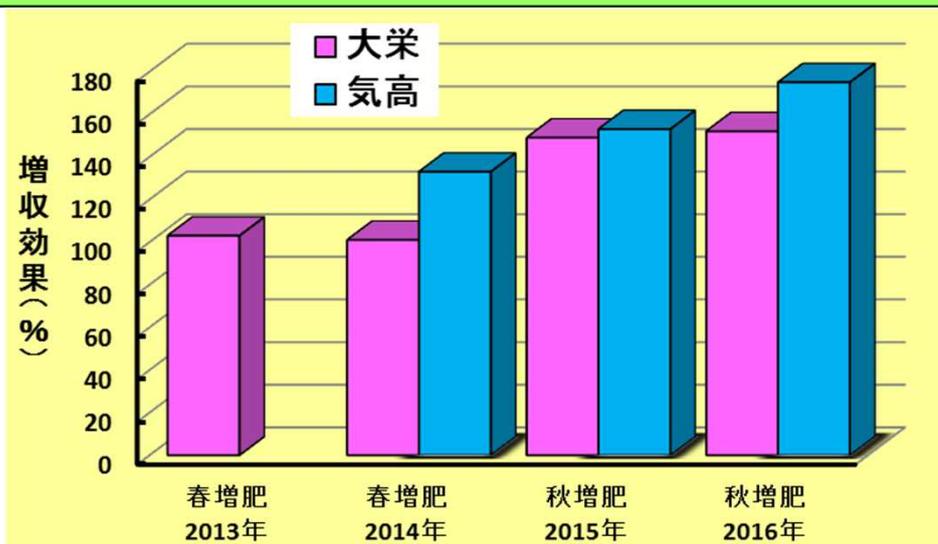


# らっきょう有機栽培における秋増肥の効果

生産者施肥量の違いに関係なく、  
春よりも秋に増肥する方が増収効果が高い

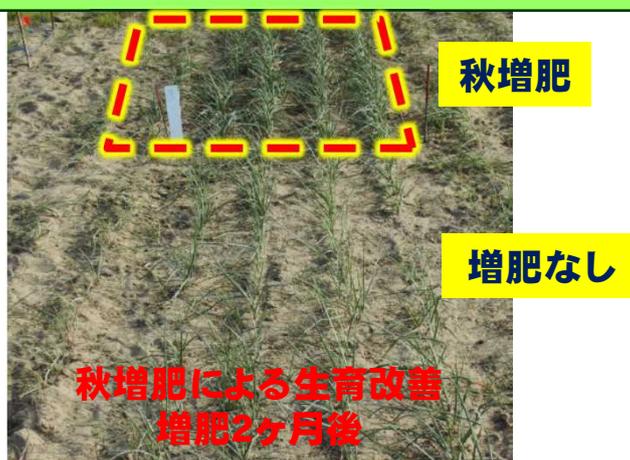


## らっきょう有機栽培における増肥時期が増収効果に及ぼす影響

注)増収効果は、増肥なし区に対する増肥処理区収量対比で示している

増肥量はN成分で、6 Kg/10a、2013～2015年は速効性の動物性有機質液肥、2016年は固形肥料で施用処理  
春増肥は2・3月に分肥、秋増肥は9・10月に分肥施用した

秋増肥により、増肥1ヶ月後程度から  
葉色が濃くなり、生育が旺盛となる。  
増肥2ヶ月後程度には、分球数も増加する。



収穫時においても、

・地上部の生育は旺盛で、葉重が増加する。

・分球数は増加し、球肥大も良好

➡ 鱗茎重が増加する

表 ラッキョウ有機栽培（大栄）における秋増肥が収穫期生育及び品質特性に及ぼす影響

試験場所 定植日 収穫日	栽培 条件	秋増肥 施用 N6kg/10a	全重 (g/株)	葉重 (g/株)	最大 葉長 (cm)	葉数(株数) (枚)	葉色 (SPAD)	鱗茎重 (g/株)	分球数	一球重 (g)	乾物率 (%)
大栄 14. 8. 8 15. 5. 28	有機	無	52.3	17.8	43.9	16.3 (3.2)	52.8	30.6	6.4	4.8	29.4
	有機	有	79.1	26.8	44.8	19.5 (4.3)	52.9	45.3	7.3	6.2	29.9
	慣行	—	121.7	42.4	57.9	23.1 (7.5)	50.6	65.4	8.8	7.4	30.3
大栄 15. 7. 16 16. 6. 7	有機	無	51.4	13.0	35.0	13.3 (4.9)	54.0	34.8	6.2	5.6	28.0
	有機	有	81.1	21.9	41.7	16.3 (6.6)	52.9	54.5	9.0	6.1	27.3
	慣行	—	88.0	20.0	40.7	14.7(21.3)	49.3	60.6	10.4	5.8	27.6

注) 調査規模は、1区20株（4反復）で実施

鱗茎重・一球重：盤茎部から5cm、根を1cm残して切除後に計測

生産者施肥量は N:30.2-P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>:40.3-K<sub>2</sub>O:20.5で、増肥量はN 6kg/10aで検討した。

- ・生産者施肥量が、標準的ほ場として大栄ほ場(N施用量30.2kg/10a)、少肥施用ほ場として気高ほ場(N施用量0kg/10a:2014、10kg程度/10a:2015~2016)で実施した。
- ・増肥量は、N成分で6kg/10a、2013~2015年は速効性の動物性有機質液肥で、2016年は固形肥料(前述液肥原料が主成分)で施用処理し、春処理は2月・3月に分肥、秋処理は9月・10月に分肥処理して行った結果である。
- ・対象者は、県内らっきょう有機栽培生産者であるが、特別栽培生産者にも適用可能と考えられる。
- ・最適な窒素増肥量、施用資材等については、今後詳細に検討していく必要がある。

(問い合わせ先)

鳥取県農業試験場 有機・特別栽培研究室 TEL: 0857-53-0721

※本書から転載複製する場合には必ず農業試験場の許可を受けて下さい。